

[成果情報名]食べやすく爽やかな風味の晩生カンキツ新品種「黄宝（きほう）」

[要約]カンキツ新品種「黄宝」は、「大橘」と四倍体「不知火」を交配して育成した。三倍体品種であり、ほぼ無核で大果となる。果皮は手で剥くことができ、ほろ苦く爽やかな風味があり、じょうのう膜は軟らかい。育成地での成熟期は4月下旬以降である。

[キーワード]カンキツ、新品種、晩生、大果、無核、三倍体

[担当]広島総技研・農技セ・果樹研究部

[代表連絡先]電話 0846-45-5471

[区分]近畿中国四国農業・果樹

[分類]技術・参考

[背景・ねらい]

広島県のカンキツ産地では瀬戸内の穏やかな気候を生かして、中晩生カンキツやレモンの栽培が盛んである。そのうちブンタン類の形質を引き継ぐ「ハッサク」、「川野ナツダイダイ」、「安政柑」等は、爽やかな風味を持ち需要があるが、種子が多い、剥き難いといった食べにくい形質等から消費は低迷している。そこで、ブンタンの爽快な風味を持つ品種の改良に取組み、食べ易い新品種を育成する。

[成果の内容・特徴]

1. 「黄宝」は、1999年に「大橘」を種子親とし、四倍体「不知火」の花粉を交配して育成した品種である。
2. 樹姿は直立と開張の中間であり（写真1）、枝梢は密に発生し極太で長い（表1）。枝梢にトゲを有するが、結実後年数を経過すると徐々に減少する。
3. 葉身の大きさは極小で、葉形指数は小で、葉の厚さは中である。花は総状で花粉量は少である（表1）。
4. 育成地（三原市木原町）における満開期は5月第4半旬で、着色は10月下旬から始まり、12月中旬に完全着色となる。成熟期は4月下旬以降である（写真1）。
5. 果実は球形であり、果梗部にネックを生じる果実もある（写真2）。
6. 果実の大きさは、「農間紅八朔」や「川野ナツダイダイ」に比べて大きく、果実重は約400gで、ほぼ無核である（表2）。
7. 果皮の厚さは8.2mmでやや軟らかく、剥皮はやや易である。ナイフを使わなくても手で剥くことができる。じょうのう膜は軟らかく膜ごと食べられ、膜にはやや苦味がある（表2）。
8. 果汁は多く、4月中旬の果実糖度は13°Brix、酸度は1.4%程度である（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 当面は広島県内のみでの普及を図る。
2. 2010年7月21日に品種登録出願公表となった。

[具体的データ]



写真1 「黄宝」の樹姿



写真2 「黄宝」の果実

表1 「黄宝」の樹および花の特性^z

品種・系統名	樹姿	枝梢の密度	枝梢の太さ (mm)	枝梢の長さ (cm)	葉身の大きさ (cm ²)	葉形指数 ^y	葉の厚さ (mm)	花序の形成	花粉の多少
黄宝	中間	密	極太(6.0)	長(20.6)	極小(24.2)	小(1.7)	中(0.37)	総状	少
農間紅八朔	中間	中	中(4.8)	長(22.4)	中(48.7)	小(1.7)	薄(0.29)	総状	多
川野ナツダイダイ	開張	中	中(4.0)	長(20.7)	極小(29.7)	大(2.2)	薄(0.30)	総状	多

^z特性値は種苗特性分類調査報告書(1994)による。

^y葉身長÷葉幅長

表2 「黄宝」の果実特性^z

品種・系統名	果実重 (g)	横径 (mm)	果径指数 ^y	果皮厚 (mm)	果皮の硬さ	剥皮性	果肉歩合 ^x (%)	じょうのうの硬さ	種子数		糖度 (° Brix)	酸度 (wt, %)
									完全	不完全 (8mm以上)		
黄宝	404	80	112	8.2	やや軟	やや易	67.7	軟	0.2	0.2	13.0	1.44
農間紅八朔	333	95	130	7.8	中	やや難	65.6	中	38.3	2.9	12.9	1.40
川野ナツダイダイ	267	101	131	6.5	中	やや難	68.7	硬	22.7	1.7	11.3	1.43

^z特性値は種苗特性分類調査報告書(1994)による。3品種は2009年3月17日に収穫して2009年4月20日に調査。

^y横径÷縦径×100

^x(果実重-果皮重)÷果実重

(金好純子)

[その他]

研究課題名：産地活性化を狙った県独自性の高いカンキツ類の新品種育成

予算区分：県単

研究期間：1999年～2010年度

研究担当者：金好純子、古田貴音、赤阪信二、塩田俊、柳本裕子、蔵尾公紀、川崎陽一郎、松下修司、金谷新作、長久逸、塩田勝紀

発表論文等：金好ら「黄宝」品種登録出願(2010)出願番号第24652号